

「いきおい」分析で総選挙を予測する

岡 本 宏*

社会現象、政治現象が変化する中で「いきおい」の動きに注目し、その分析を世論調査データを使って試みてみた。情報化社会ではますます、「いきおい」同士が複雑にからみあい、種々の複合的ブーム現象を引き起こすなど、世の中の動きをリードしている。ここではまず「いきおい」の原則的な動きを取り上げ、さらにそのからみあいに焦点を当てながら、「複合いきおい」を抽出してみた。この「複合いきおい」から'96総選挙の各政党当選者数を、「大胆」に予測・検証した。

はじめに

選挙結果は、政党のいきおいが織り成す作品である。

1993年の総選挙の時は、新党ブームに沸いて、新生、さきがけ、日本新の3新党が進出。自民と社会の2大既成政党による55年体制は、ついに終わりを告げた。3新党の躍進ぶりには、抑えることができない上昇のいきおいがあった。一方、自民、社会の既成政党には、止めることのできない下降のいきおいがあった。この上昇と下降のいきおいが、からみあって'93年総選挙の劇的結果をもたらしたといえる。

'96年の総選挙では、民主党の新党ブームに期待がよせられたが、いきおいはいま一つで現状維持に留まった。一方、自民党は復調のいきおいに乗って過半数を突破するかと思われたが、伸び悩み少数単独政権に落ち着いた。一筋なわけはいかない、有権者の「味な選択」に、いきおいの読みの難しさを思い知らされた。

実際に「いきおい」が政治現象を動かしていると痛感したのは、朝日新聞社時代、選挙調査に携わるようになってからである。古い話にな

るが、1979年の総選挙で129選挙区、10万1,200サンプルの選挙情勢調査を実施した。この調査結果には自信を持って「自民の復調は著しく、与野党の攻防点となった安定多数271議席に達する勢い」と報道した。ところが結果は「単独過半数」も割って、当選者数は前回よりも1人少ない248人という大番狂わせになった。調査の推計は、自民党の当選者数が 270 ± 10 。選挙結果は推定の幅を大きくはみ出し、マイナス22となった。新聞報道から推測すると、今回の結果も似ているようだ。

この時は、予測が大きく外れた原因を究明するための委員会が設置され、追跡調査も実施した。サンプリング、調査、推計などこれまでの方式に誤りはなかったか点検してみたが、はっきりこれが原因と指摘できるものは見つからなかった。そこで、調査データの中に見落としていた新しい動きはなかったかどうか洗い直してみると、思いがけないところに変化が起きていたのがわかった。その動きは、情報化社会の政治現象を反映した、政党のプラス・マイナスの加速度的な「いきおい」といえる変化だった。この「いきおい」が'79年の総選挙のときは、

自民党にはマイナスに働いて、当選者の推計値を大きく狂わしていたことがわかった。この「いきおい」には様々な要因が複雑にからみあっていて、どうすれば数量的にとらえることができるかがその後の課題となった。

今回、1996年10月の総選挙でこの「いきおい」は、どの政党にどのように働いたのであろうか。選挙前議員数と比べると、自民当選者数は+28の239、新進は-4の156、民主は±0の52、共産は+11の26、社民は-15の15、さきがけは-7の2だった。政党別に前回勢力との増減をみる限り、自民と共産にはプラスの「いきおい」、新進と社民にはマイナスの「いきおい」が働き、民主には「いきおい」なしといえる。各種新聞報道の調査推計記事は自民復調、新進後退といった大勢は正しくとらえていたが、選挙結果と対比してみると、自民と新進の推計にかなり狂いが生じたようにみえる。朝日新聞10月16日付朝刊一面のメイン見出しは「自民、過半数の勢い」だったが、結果は過半数の256を大きく下回る239だった。サブ見出しは「新進、後退の様相」とあり、紙面グラフ推計新勢力で読むと2ヶタ（桁）の後退が予想されていたが、実際は-4に留まった。民主、社民、共産党については、報道した通りの結果になった。しかし自民と新進は、大勢の方向を誤っていなかったものの、結果論としていえば複雑に変化する「いきおい」の動きを読み切ることができなかったのではないだろうか。'96の政党の「いきおい」は、プラス・マイナスの双方向からみあいながら迷走、まさにいまの政治現象を投影していたようだった。

1. 「いきおい」に2つのタイプ

(1) 「いきおい」の意味

広辞苑によって、「いきおい」「勢い」の意味を要約すると、『人・物・事が発動、進行したり、物・事の作用を発動、進行させたりする場合、その強さ、速さなどにみられ、ときには

躍動する力、または他を圧する勢力となって現れる。物事が進行するときには、はずむ（はねかえれる）こともある』ということになる。

物事が発生、進行、転換、循環する過程に現れる力で、躍動する力と他を圧する勢力の2つのタイプがある。躍動する力は、いきいきとおどろ動き、加速度的に浮揚、上昇するが、やがて跳ね返って方向転換、縮小、下降に向かう伸縮型いきおいといえる。他を圧する力は勢力の拡大をすすめ、結合力を働かして結束に向かうが、やがて離散をはじめる集散型いきおいといえよう。

伸縮型いきおいは、浮上志向と沈静志向の両極に分かれて働く。また集散型いきおいは、拡大志向と離散志向の両極に動く。

(2) 政党のいきおい

政治現象の中では、政党の「いきおい」は有権者の支持率といった形をとってあらわれる。伸縮型いきおいは、選挙のさい政党や候補者に対する「人気度」の色彩が強い、とみることができよう。政党、政治家の人気の魅力といえ、政策、人柄、清潔、信念、実行力、庶民性、先見力、若さなどいろいろある。最近の選挙では、メディアを利用したパフォーマンスなども、大切な要素となってきた。

人気が浮揚すると伸縮型いきおいが上昇し、それに比例する形で得票の方も伸びてくる。逆に人気が沈静化すると、伸縮型いきおいは下降して、得票の方も低下する。

一方、集散型いきおいは、有権者が政党や候補者を支持する広がりや度合を示すもので、「集結度」ともいえる支持のかたまり具合とみることができる。有権者の支持の集結度が強固であればあるほど、それに比例する形で票はその政党や候補者に集まってくる。しかし、集結の度合が弱くなると、政党や候補者に対する有権者の支持離れがはじまり、支持票は離散する。

選挙で、伸縮型いきおいの「人気度」を測る尺度として考えられるのは、急増しているどの

政党にも属さない無党派層の人たちの、政党や候補者に対する支持率である。この無党派層の支持率を一つの目安にして、政党や候補者に対する人気度を読むことができる。つまり、自分が所属する政党以外の有権者、それも支持政党がない無党派層からも人気上昇してきているなら、これまでより票を伸ばし、躍進することは間違いない。とはいっても、人気というもの気分やムードに左右されやすく、人気急上昇してもすぐ冷めるといったマイナス面も持っている。

そこで、人気で高まった支持を維持するため、もう一つの集散型いきおいが必要になってくる。集散型いきおいの「集結度」は、浮動的な無党派層の支持とは別に、比較的堅い政党支持層の支持率を物差しとしている。この支持は、自民党の場合でいうと、自民支持層と同じ自民党または自民党候補者に投票するといった、支持する政党と投票する政党、候補者が一致した支持率を意味する。しかも政党支持を表明した人が、選挙のさい同じ政党や候補者に投票する、と態度を明確にしたのだから、それだけ強固な支持といえる。

(3) 生活分野のいきおい

日常の生活の中にも、様々ないきおい現象がみられ、ときにはヒット商品を生み出す引きガネになっている。これら日常の生活分野の「いきおい」にも、伸縮型と集散型の二つのタイプがある。一つは消費者の「人気度」を測る物差しとして伸縮型いきおい、もう一つは消費者の生活「重視度」を示す尺度として集散型いきおいがある。

選挙のときの無党派層支持率に匹敵するのは、「消費予備軍」のいろいろな消費態度の賛成率。ここで「消費予備軍」とは「食生活」「レジャー活動」「よそおい」「住まい」「人との交際」などいろいろな生活分野で、「どの程度力を入れていきたいか」の重視度質問に、「どちらともいえない」と態度を保留した人たち。ち

ょうど政党支持の質問に「好きな政党なし」「支持政党を答えない」と答えた無党派層の態度に似ている。態度保留ということは、これまでの消費態度にはこだわらず、新しい物やライフスタイルを求めようとする上昇志向の人たちともいえる。しかし流行の兆しには敏感だが、気まぐれなところもあり、その態度は浮動的、流動的な面もある。

一方、堅い政党支持層の支持率に対応するのは、消費重視層のいろいろな消費態度賛成率。重視層の人達は、各生活分野で「力を入れていきたい」と積極的な態度の人達。この人達の生活意識、消費態度は浮ついたものではなく、堅実に生活領域に対し拡大志向が強い。これら社会現象面のいきおい分析については、改めて発表することにして、ここでは選挙を中心に話を進めることにする。

2. 対照的な1979年と1980年の総選挙

(1) 1979年の総選挙

1979年総選挙は9月7日衆議院を解散し、同17日公示、10月7日投票が行われた。

選挙の争点は、一般消費税をめぐる増税問題。大平首相は解散後も、一般消費税の80年度導入による財政再建を強調。しかし自民党内には導入反対意見が強く、これでは選挙戦にマイナスとの判断から、投票日の10日前に導入を断念した。

ちょうど時を同じくして、鉄建公団のカラ出張、やみ給与が判明、公務員の同種事件が引き続き問題化した。

こういった背景のもとに選挙は戦われたが、最大の焦点は、自民党が過半数もしくは安定過半数の議席を獲得するかどうかだった。各社調査結果は、自民当選者数を朝日推計270人前後、毎日269人前後、読売270人前後と読んだ。いずれも過半数の256人は確実、場合によっては安定過半数271人に手が届くと予測した。ところが、投票結果は自民の当選者は248人にとどま

って、過半数にも達しなかった。朝日新聞社の各党の推計と選挙結果は、次の表1の通り。

表1 各党の当選者数（推計と選挙結果）

1979年 総選挙	当選者数（人）		公示前 勢力
	選挙結果	推 計	
・自 民	248	270±10	249
社 会	107	102± 9	117
・公 明	57	46± 6	56
・共 産	39	29± 6	19
民 社	35	31± 5	28
・新自ク	4	11± 3	13
社民連	2	2± 1	3
無所属	19	20± 4	7

（・は推計の幅をはみだしたものの）

(2) 1980年の総選挙

1980年5月16日、野党が提出した大平内閣不信任案は、与党自民の福田、三木両派の欠席戦術により可決。同19日衆議院を解散し、同30日参院選公示、6月2日衆院選公示、同22日初の衆参同日投票が行われた。

選挙中の5月31日、大平首相が選挙遊説中に倒れ、虎の門病院に入院。6月12日、心筋梗塞で大平首相が死去し、選挙戦は自民の「弔い合戦」となった。

この総選挙では、「与野党逆転」となるかど

うかが焦点だった。自民党の当選者推計数は、272±9で前回とほぼ同じ数値になった。選挙結果は284まで伸び、自民党安定多数という大勢は予想通りだった。前回の自民当選者数も推計は270でほぼ同じ数値だったが、選挙結果は248とまったく逆の方向に動いた。

各党の推計と選挙結果は、表2の通りである。

(3) 政党支持率で「いきおい」を読む

自民党の支持率について、1976年と79年の総選挙時を比較すると、31.7%→34.8%に上昇している。ところが選挙結果の自民党議席数を公示前勢力と比べると、逆に1議席減、調査推計値に対しては22議席下回った。問題はこの自民支持率3.1%の上昇は3年前との比較であって、選挙間際の動きを反映したものではない。約1カ月前の8月末実施した全国世論調査によると、自民支持率は42%で、明らかに下降していた。

1979年総選挙の自民支持率（ F_{79} ）と1976年総選挙の自民支持率（ F_{76} ）の差は

$$F_{79} - F_{76} = 3.1\%$$

1979年総選挙の自民支持率（ F_{79} ）と直前の全国世論調査自民支持率（ F_{79}^* ）の差は

$$F_{79} - F_{79}^* = -7.2\%.$$

二つの差を足し併せると、 $3.1\% + (-7.2\%) = -4.1\%$ になる。この自民支持率の下降傾向は、選挙中も投票日まで続いていた。

朝日新聞社では、中選挙区制の「総選挙情勢調査」のときA調査とB調査の2つの時点で政党支持率を調査してきた。A調査は選挙区のうち比較的無風区の54選挙区について、B調査は比較的激戦区の75選挙区について実施。

'79年と'80年の総選挙時における自民支持率の動きは図1の通りである。わずかに2、3日おいたA、B2つの調査で自民支持率は'79年で下降し、'80で上昇している。この自民支持の

表2 各党の当選者数（推計と選挙結果）

1980年 総選挙	当選者数（人）		前回の 当選者数
	選挙結果	推 計	
・自 民	284	272± 9	248
社 会	107	105± 9	107
・公 明	33	44± 6	57
民 社	32	31± 5	35
共 産	29	33± 6	39
新自ク	12	10± 3	4
社民連	3	3± 1	2
無所属	11	13± 3	19

（・は推計の幅をはみだしたものの）

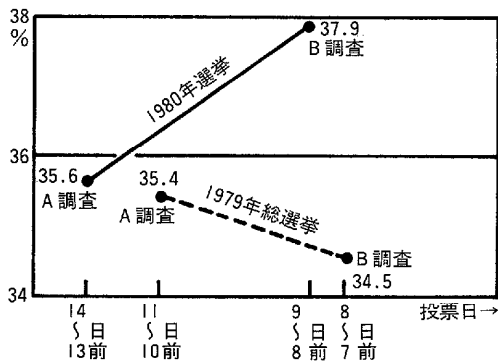


図1 A, B調査時点における自民党支持率の動き

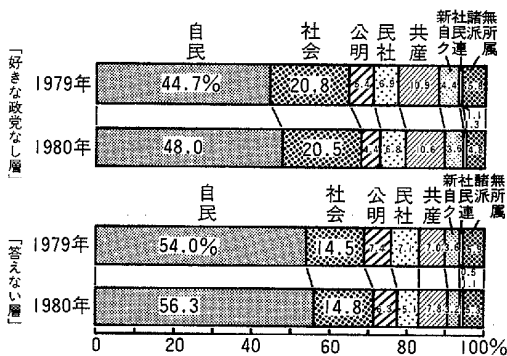


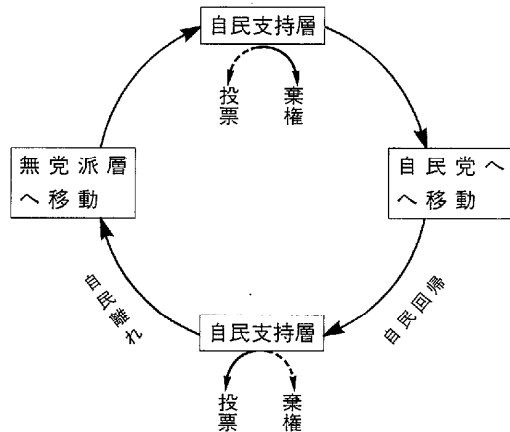
図2 無党派層の各党候補者への支持

勢いついた動向が、有権者の投票行動に微妙な影響を与えたことは間違いない。

そこで'79年総選挙のA, B調査の、自民支持率の動きから「いきおい」=変動率を求めて推計値の補正を試みた結果、248に近い補正値になった。

次の'80年の同日選挙では、A, B調査の自民支持率は35.6%から37.9%に上昇した。このAからBへ上積みされた自民支持層は、どこから移って来たのか。他の政党をみると、AとBの間にほとんど支持率の変化はみられなかった。とすると「好きな政党なし」「答えなし」いわゆる無党派層（注）が、自民支持率の増減に深く関係しているといえる。自民党にマイナスのいきおいが働くときには、支持層に自民離れが起きて無党派層に流れ、逆にプラスのいきおいが働くときには、無党派層から自民支持への回

帰現象が起きると考えられる。無党派層はこのとき35.5%で、自民に次ぐ第2党だが、この無党派層のいきおいも正しく掴むことが予測の決め手になる、とわかった。そして、票の大きな流れは自民支持層と無党派層を両極に、次のようなサイクルを描いているのではないかと考えた。



このサイクルから、無党派層→自民支持への移動、そして自民党候補者へ投票の流れが明らかになり、36の議席増が起りえた、とうなずけた。

そこで、無党派層が'79年と'80年の総選挙でどの党の候補者に投票するか、選挙の世論調査結果から、その支持模様をみたのが図2である。自民党の候補者は無党派層のうち「好きな政党なし層」から5割程度の支持を集めているのに対し、社会党では「好きな政党なし層」の2割、共産党が1割、公明、民社党はそれぞれ1割未満と少ない。この好きな政党なし層の各政党候補者支持率（無党派層のいきおいの一つ）は、公明を除いて各党の得票率に非常に似た数値を示しており、補正値として十分使えることがわかった。

次に政党のいきおいとして、各政党支持層が自分の政党候補者を支持する割合を考えてみた。'80年と'79年の政党・無党派層いきおいと当選者数の差を、一覧できるうよにまとめたのが表

表3 政党・無党派層のいきおいと各政党当選者数

'80 '79 年 年 総 選 挙	(S) 政党支持層の同党 候補者支持率 「集散型政党いきおい」			(M) 好きな政党なし層の 政党候補者支持率 「伸縮型の無党派層いきおい」			政党当選者数		
	'79年	'80年	'80-'79年	'79年	'80年	'80-'79年	推 計	選挙 結果	差
自 民	30	33	+3	45	48	+3	272±9	284	+12
社 会	9	9	±0	21	21	±0	105±9	107	+2
公 明	3	3	±0	5	4	-1	44±6	33	-11
民 社	2	2	±0	7	7	±0	31±5	32	+1
共 産	3	3	±0	11	11	±0	33±5	29	-4
新自ク	1	1	±0	4	4	±0	10±3	12	+2
社民連	0	0	±0	1	1	±0	3±1	3	±0

3である。

'80年衆参同日選挙の情勢調査では、図1の自民党支持率のA35.6%からB37.9%の上昇いきおいと、表3の(S)政党いきおい、(M)無党派層いきおいから補正値を試算した。その試算の最高数値が286となり、衆議院情勢調査結果を報道した6月19日付紙面に、次のような解説記事を載せた。

「数日間に、自民支持率は35.6%から37.9%に急上昇している。この勢いが272という数字の中にも反映しているわけだ。この自民急上昇の動きなどを関連させて当選者数の変化率を出し、推計の補正を試みると最高値の281を上回る数値となる。自民の支持率を押し上げたものを素直に推測すれば、12日（投票日の10日前）の大平首相の急死しか考えられない。そのショックが一番大きかった時期にB調査は実施されている。A調査からB調査への自民支持率の上昇カーブが、そのまま投票日まで続くのか、それとも下降に転じるのか、調査からは何ともいえない。ただ、A調査の時点でも自民支持にはかなりはずみがついているので、AとBの自民

支持率の変化をゼロにするなどして補正を試みても、当選者数は267、8人には達するということになる」

AとB調査の政党支持率の動きから、第一次いきおいを試算し、これを補正値として推計値を修正した。さらに表3の「S. 政党支持層の同党候補者支持率」を求めた。これは政党の拡大と離散の集結度を示すもので、集散型いきおい。次に求めた「M. 好きな政党なし層の候補者支持率」は有権者を引きつける人気度をあらわし、伸縮型いきおいに当る。

「Sのいきおい」と「Mのいきおい」について、'80と'79の総選挙の差を各政党ごとにそれぞれ計算することにより、いきおいがあるのかわからないのか、あればプラス、マイナスどちらに向かっているかがわかった。いきおいがあるのは自民党と公明党の二政党だけで、他の政党はいきおいなし。そして自民党はSもMもプラスのいきおい、公明党はMだけでそれもマイナスのいきおいであることが明らかになった。

選挙結果と比べると、推計の幅をはみ出し、予測が狂ったのは自民党と公明党だけ。他の政

党はみな推計の幅におさまリ、予想が的中した。つまり、推計を狂わし補正を必要とするほどの、いきおいはなかったというわけだ。

自民党と公明党には、SとMとのいきおいに集散型と伸縮型の特性を加味し、さらにベクトルを求めるなどして補正値を算出した。この補

正值で修正すると、自民党の推計値は268～286になり、選挙結果284は推計の幅の中におさまった。だが公明党の方は補正值で修正しても36～42で、いきおいを上回る要因が他にあることが考えられた。

表4 自民、社会のいきおいと当選者数

(朝日新聞世論調査室資料参考)

総 選 挙	自民 支持 率	S 同 党 候 補 者 支 持 率 自 民 党 支 持 層 の	M 自 民 党 候 補 者 支 持 率 無 党 派 層 の	自 民 党 当 選 者 数		社 会 支 持 率	S 同 党 候 補 者 支 持 率 社 会 党 支 持 層 の	M 社 会 党 候 補 者 支 持 率 無 党 派 層 の	社 会 党 当 選 者 数
79年	34.8	30.2	47.9	248		13.5	9.7	18.6	107
80年	37.0	32.7	50.7	284		12.7	9.7	18.7	107
80年－79年	+2.2	+2.5	+2.8	+36		－0.8	0	+0.1	0
80年	37.0	32.7	50.7	284		12.7	9.7	18.7	107
83年	39.2	33.7	48.1	250		12.6	9.2	18.0	112
83年－80年	+2.2	+1.0	－2.6	－34		－0.1	－0.5	－0.7	+5
83年	39.2	33.7	48.1	250		12.6	9.2	18.0	112
86年	37.1	32.2	60.0	298		10.3	6.6	13.4	85
86年－83年	－2.1	－1.5	+11.9	+48		－2.3	－2.6	－4.6	－27
86年	37.1	32.2	60.0	298		10.3	6.6	13.4	85
90年	39.2	34.1	47.8	275		18.9	13.2	23.0	136
90年－86年	+2.1	+1.9	－12.2	－23		+8.6	+6.6	+9.6	+51
90年	39.2	34.1	47.8	275		18.9	13.2	23.0	136
93年	25.3	20.6	41.5	223		8.3	5.8	13.8	70
93年－90年	－13.9	－13.5	－6.3	－52		－10.6	－7.4	－9.2	－66

Sは「政党・集散型いきおい」で支持の集結度を示す（比率は全体比）。

Mは「無党派層・伸縮型いきおい」で人気度をあらわす（比率は小計比）。

3. 選挙のカギを握る「いきおい」

(1) 「いきおい」で自民党を予測する

予測が外れて大きな影響を受けた1979年の総選挙を教訓に、中選挙区制度最後の93年総選挙まで、自民、社会の両政党について「いきおい」分析してみた。

表4で自民党のいきおい分析をみると、'80年総選挙は前回の'79年総選挙に比べ、S、Mの両いきおいとも+2.5、+2.8のプラスとなり、当選者数も+36人増。'83年と'90年総選挙の場合は、どちらも前回との差をみると、Sのいきおいの方は+1.0、+1.9でプラスだが、Mのい

きおいはプラスから-2.6、-12.2とマイナスに落ち込み、当選者はそれぞれ-34人、-23人の減。'86年総選挙の場合の前回差は、SとMのプラス、マイナスが逆になって、Sのいきおいは-1.5なのに、Mのいきおいは+11.9となり、当選者数は+48人に増えた。これを見ると、当選者の増減にはSの政党・集散型いきおいより、Mの無党派層・伸縮型いきおいの方がより影響力を持っているといえる。'93年総選挙は新党ブームの煽りをくって、自民党のいきおいはSもMも前回対比で-13.5、-6.3とダウンし、当選数も-52人と大幅に減った。

SとMのいきおいをグラフにしたのが、図3である。Sの「政党・集散型いきおい」を横軸

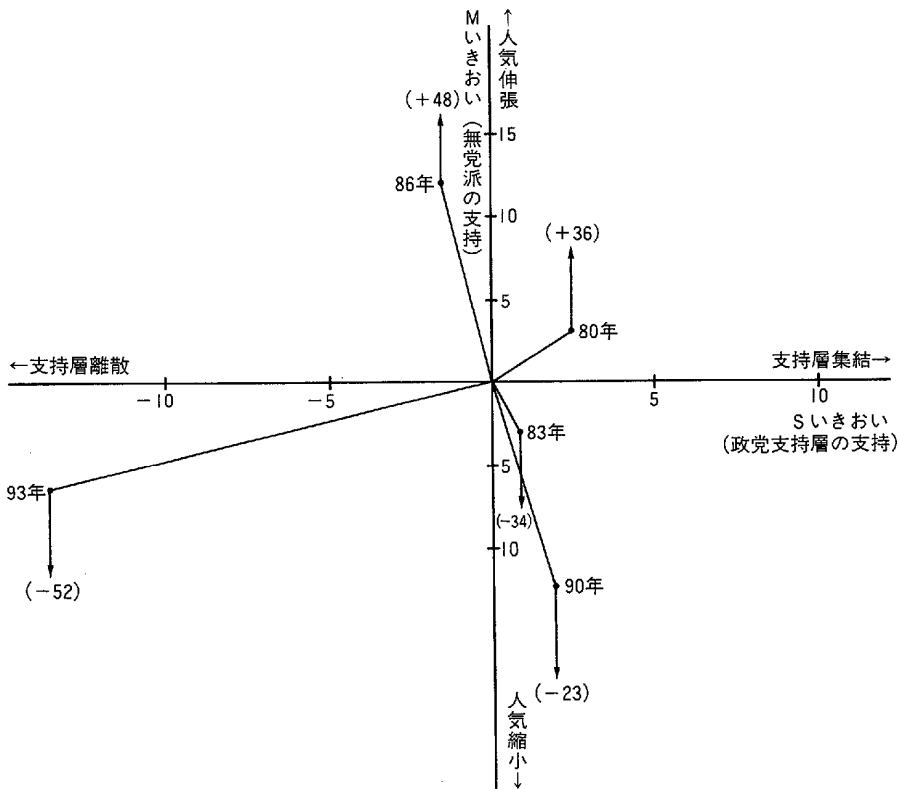


図3 自民党のいきおいと当選者の増減

に、Mの「無党派層・伸縮型いきおい」を縦軸にとった。

'80年総選挙のいきおいは、SもMもプラスで座標軸右上の第1象限。次に'83年のいきおいは、SがプラスだがMはマイナスになり、右下の第4象限へ。'86年の総選挙ではSはマイナスに変わり、Mはプラスに転じて、左上の第2象限に移る。'90年総選挙ではSがプラスに移動し、Mがマイナスに下降して、再び右下の第4象限へ。'93年総選挙はSもMもマイナスで、左下の第3象限に入る。この動きを図にすると、右回りのサイクルを描く。

自民党のいきおい現象は、伸張し集結しやがて頂点に達する。すると縮小、離散がはじまって、いきおいはマイナスの沈静化へ向かう。再びいきおいが活動をはじめ、伸張、集結へ向かってプラスに転じる。この周期を追跡すると「浮上」→「充満」→「停滞」→「沈静」のいきおいサイクルをたどることができる。

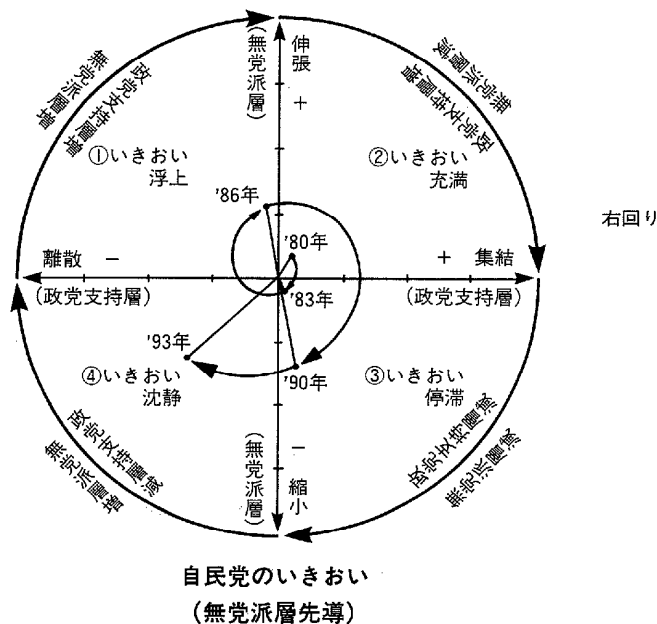
無党派層の人气が前回を上回るようになると、いきおいは①浮上してくる。すると無党派層先導の形で政党支持層も巻き込み、両層のいきおいはともにプラスになり、いきおいは②充満す

る。やがて無党派層の人气も陰りが出はじめ、いきおいは③停滞。一方、政党支持層のいきおいも離散がはじまり、両層のいきおいはともにマイナスになり、いきおいは④沈静化する。

(2)「いきおい」で社会党(社民党)を予測する

こんどは表4に戻って、社会党(社民党)のいきおいをみることにする。'80年総選挙では前回に比べて、Sのいきおいは0、Mのいきおいも僅かに+0.1でほとんどいきおいはみられず、当選者数も前回と同じで変化なし。'83年総選挙もS、Mともに-0.5、-0.7でほとんどいきおいはみられず、当選者の方は5人の微増。'86年と'93年の総選挙は、それぞれ前回との差をみるとSのいきおい-2.6:-7.4、Mのいきおい-4.6、-9.2でともにマイナス。当選者数も-27人、-66人と大きく後退した。'90年総選挙はこれとは逆に、S、Mともいきおいは+6.6、+9.6とプラスになり、当選者数の方も+51と大幅増加した。図4は、これをグラフにあらわしたものである。

これらの分析には、朝日新聞社世論調査の



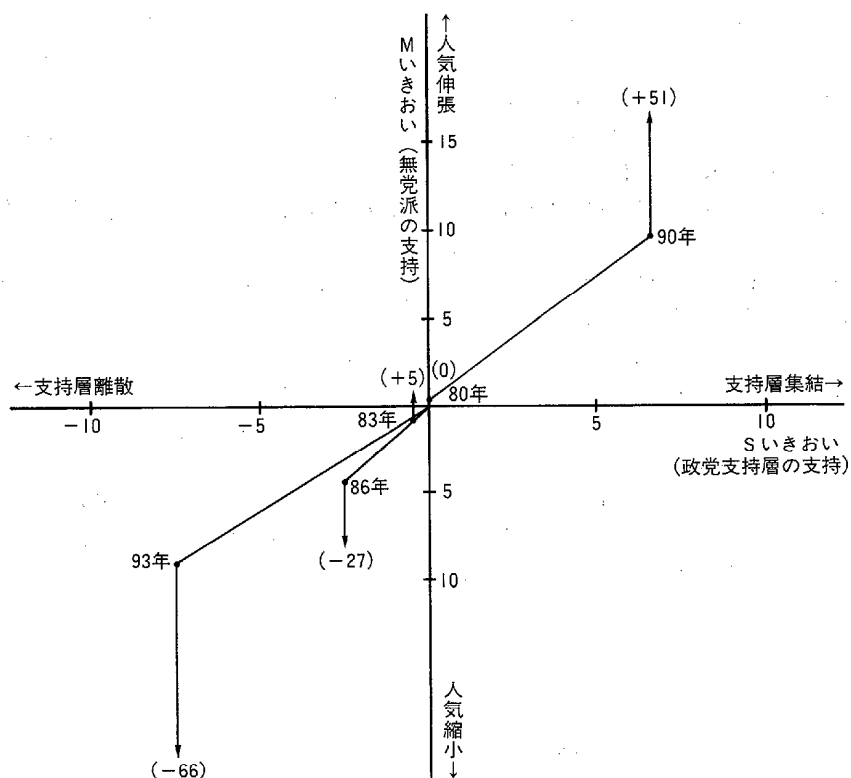
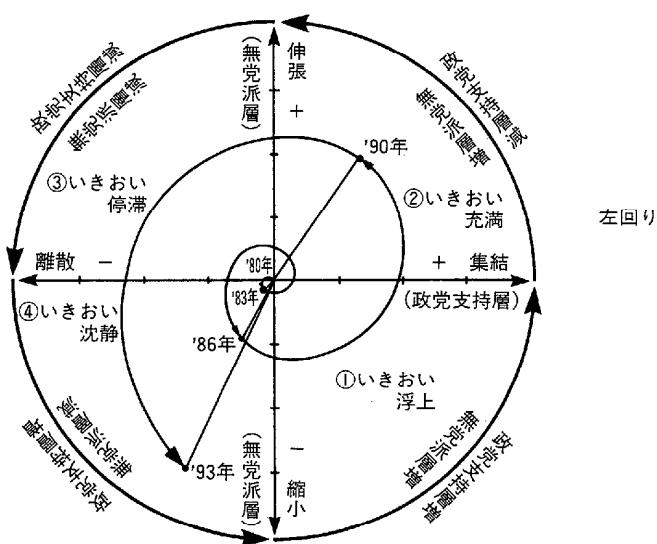


図4 社会党（社民党）のいきおいと当選者の増減



社会党（社民党）のいきおい
(政党支持層先導)

データを参考にした。

「社会党（社民党）のいきおいと当選者の増減」のグラフをみると、'80年、'83年総選挙はS、Mともにほとんどいきおいなく、座標軸の原点に近い。'86年総選挙のいきおいは、SもMもマイナスで座標軸左下の第3象限。'90年総選挙では、SもMもプラスのいきおいに転じて、右上の第1象限に移動。'93総選挙は再びSもMもマイナスになり、第4象限に落ちる。この動きを図にすると、左回りのサイクルになった。

左回りの社会党のいきおいサイクルは、政党支持層が無党派層に先行し、先導する形で活動する。政党支持層のいきおいが増加し、拡大するときには、無党派層を引き込んでいきおいは浮上し、充満へと集結する。'90年総選挙がそれで、政府自民党の消費税とリクルート事件批判の波に乗った社会党は、'89年参院選に大躍進、そのいきおいが'90年も拡大、充満へと続いた。しかし、最近の社民党は支持層が民主党へ流れ、政党支持層先導のいきおいは風前の灯火といったところだ。

さて、政党支持層のいきおいが無党派層を先導する形で①浮上すると、無党派層のいきおいも同調してプラスに転じ、上昇して②いきおい充満する。やがてそのいきおいは「飽和状態」がやってきて、政党支持層のいきおいは離散をはじめ③停滞するようになる。すると、無党派層のいきおいも下降をはじめ、両層のいきおいても前回差マイナスとなり④いきおい沈静化する。

4. 新制度で変わる総選挙のいきおい

(1) '96総選挙の特徴

'96年総選挙は、小選挙区比例代表並立制というまったく新しい選挙制度が導入されて初めての選挙だった。

朝日新聞社では、全小選挙区（定数300）それぞれについて各1000人の合計30万人に対して

電話調査を実施した。この調査データをもとに、小選挙区では各候補者の推計得票率と当選確率を算出した。比例区ではブロック別に各政党推計得票率を求め、ドント方式によるシミュレーションを行って議席数を推計した。その結果は10月16日付朝刊で、次のように報道された。

1面「自民、過半数の勢い」

「新進、後退の様相」「民主はほぼ現状維持」「さきがけと社民は半減」「共産は倍増も」

2面「『政党本位』の選挙と言うが……支持率と一致せぬ議席」「多い『人物で選択』」「小選挙区は『風』も左右」「政党支持率、無党派層が56.7%」「自民21.8%、新進8.6%、民主5.1%」「投票『必ず行く』72%」「20代は44%、際立つ低さ」

3面「無党派層、比例で民主を後押し」「小選挙区では自民最多」「比例区と小選挙区、投票『ねじれ』も」

'93年総選挙で55年体制が崩壊し、「非自民連立」の細川、羽田政権が成立。しかし、1年足らずで「自社さ連立」の村山、橋本内閣が生まれ、連立政権4代の真価が問われる選挙でもあった。

しかし投票率は、59.65%（小選挙区）で戦後最低を記録。これは'93年から始まった政治改革に対する国民の評価でもあり、政治不信は根深いことを改めて知らされた。

さて、今回の総選挙の焦点は、①自民党が単独過半数にどこまで迫れるか②自民党と新進党の当落競り合いの行方は③その選挙戦に新党の民主党が割り込み、どこまで勢力を伸ばすことができるか、に絞られた。

選挙結果について、また朝日新聞の10月21日付朝刊の見出しをみると――

1面「自民復調、首相続投へ」「自社さ連立継続めざす 単独過半数届かず」「新進

後退、民主は維持」「共産は躍進 社民・さきがけ壊滅的な打撃」「投票率最低59.65%」

衆院選各党の獲得議席数の（グラフ）と（表）＝自民239、新進156、民主52、共産26、社民15、さきがけ2、民政連1、無所属9

2面「連立 社民動向が焦点」「自民、説得に全力 土井氏は慎重姿勢」「社民、歴史的使命に幕 さきがけも存亡の危機」「次期政権行革が命運握る 消費税5%へ調整課題」「小選挙区、自民に味方 安定望む民意引き出す」「自民伸張を経済界評価」

3面「新進不振 結束揺らぐ」「小沢党首進退問題浮上へ 批判派、独自行動か」「民主、連立入り慎重 行革では協力の余地」「共産、躍進で自信 国会での存在感増しそう」「旧社党系の労組は安ど」「小選挙区『死票』が半数超す」「飛び越し復活」も続出」「投票率最低 政策 新制度 有権者意識 複合的要因響く」「無党派層の票は民主・新進・へ半数 投票者調査」

今回総選挙の特徴と問題点は、この見出しの中にすべて網羅されている。情勢調査予測と選挙結果を比べると①自民党復調とはいえ、過半数には届かず、予測したような伸びはみられなかった。自民党が勝ち過ぎることは困るが、政局の混迷は避けたいという有権者の意識が、投票のさい過半数にちょっと足りない、ほどほどの議席を、という選択となってあらわれたといえよう。復調のいきおいに乗った自民党に、ゴールまでブレーキがかかった感じだ。②政権奪取を目指した新進党は、選挙前より4議席減らした。新進党はもっと悪いとの予測だったから、後半盛り返し健闘したといえる。しかし3%消費税据置き論と、18兆円大幅減税論の「甘いさきやき」に対する国民の失望感を、最後まで払拭することはできなかった。③選挙直

前に旗揚げをぶつけ、「新党ブーム」を期待した民主党は、現状維持の勢力にとどまった。有権者の間には'93の新党ブームに対する揺り戻しがはじまった過渡期であり、民主党も新風を巻き起こすまでにはいたらなかった。④共産党は、比例区を中心にいきおいに乗り議席を伸ばした。「オール自民党政治」の批判が、無党派層の支持を引き寄せた。⑤55年体制の一方の主役だった社民党は、共産党を下回る議席に落ち込んだ。これは戦後の歴史的使命を、社民党は事実上終えたことを意味する。新党さきがけも「第3極」づくりに乗り遅れ、選挙前の9議席を2議席に減らす壊滅的な打撃を受けた。

以上のことから、選択の方向は「変化志向」よりも「安定志向」にやや傾斜したといえる。迷いと手さぐりの中から、有権者は政治全体の安定を願った判断であったといえよう。

(2) 「いきおい」分析でみる '96総選挙

新選挙制度は小選挙区比例代表並立制で、これまでの中選挙区制度とは異質であり、むしろ地方区と比例代表からなる参議院選挙に、制度の仕組みは近い。だが、定数は、総選挙の衆議院が小選挙区300、比例代表200の計500（旧中選挙区制は511）に対し、通常選挙の参議院は地方区152、比例代表100の計252（3年ごとに半数改選）で2倍近い開きがある。

そこで、前回選挙と「いきおい」の差によって当選者数の差を予測する、「いきおい」分析の基本は今回そのまま使って、差の出し方に工夫を加えた。

第1は無党派層の扱いである。56.7%と6割近くに膨張した無党派層を、「好きな政党なし層」38.2%と「答えない層」18.5%に分け、いきおい分析では「好きな政党なし層」を扱うことにした。その理由は、投票率がついに6割台を割り込み、なかでも浮動層が多い無党派層の方が、棄権率が高いとみられる。その無党派層の中でも「好きな政党なし層」は「答えない層」に比べ、政党に批判的だがまだ政治関心は

高い。したがってより投票行動のカギを握っていると考え、「好きな政党なし層」に無党派層いきおいを代表させることにした。

第2は'96年と'93年の総選挙のいきおいの差だけではなく、'95年と'92年の参議院選挙のいきおいの差も対比（差の差）して、新しい'96年の総選挙のいきおいを算出した。'96年の総選挙のいきおいだけ参議院選挙との差をとったねらいは、制度が変わって特に比例代表のいきおいをみるためである。

第3に、'96年の当選者数の差の定数比は、'96衆院選、'95参院選それぞれに前回との差を出し、さらにその値の差を求め、それを衆院（500）と参院（257）の定数と757で割って算出した。

時系列的に衆・参選挙のいきおいが追跡できるのは、自民、社民、共産の3党で、その「いきおいと当選者数」は、表5、6、7の通りである。

前回との差をもとに、各政党の拡散的なSのいきおいの組織的変化を㊦とし、好きな政党なし層の伸縮的なMのいきおいの動態的変化を㊧として算出した。これら2つの数値をプラスして、「複合いきおい」を求めた。一方、当選者数はすでに述べたが、前回との差を全定数で割って、増減の割合を出した。そして自民党について、各選挙ごとに「複合いきおい」と「当選者数増減定数比」の値が、どれくらい相関しているかグラフ（図5）に書いてみた。縦のY軸に当選者数増減定数比をとり、横のX軸にS・M複合いきおいをとると、各選挙のXとYの点はほぼ直線上に並んだ。

この相関が強い、複合いきおいと当選者数の増減定数比の関係を、どうすれば今回の予測に役立てることが出来るか、結果論になるが検討してみた。

(3) 回帰直線で自、社、共の議席を読む

そこでまず自民党の場合、参院選'89-'86年、衆院選'90-'86年、参院選'92-'89年、衆院選

'93-'90年、参院選'95-'92年、の5回について、回帰式を求めた。図6参照。

$$\text{回帰式 } Y=0.549X+1.1032$$

この回帰式のXに、表5-2にある、事前の選挙情勢世論調査で求めた'96年「複合いきおい」をあてはめてみた。この複合いきおいは、大きく揺れた最近の選挙について、時系列的にいきおいの差をとり、それを今回の'96年総選挙につないだものである。政治改革の原動力となった'93総選挙のいきおいと、'92年参院選のいきおいの差と、今回の'96年総選挙のいきおいと'93年いきおいの差とを、S「自民党支持層のいきおい」M「好きな政党なし層のいきおい」それぞれに対比（差の差）して変化をみた。最も近い時点の'95年参院選とのいきおいの差も出して、最も影響力のある最新の変化率を算出。これらをすべて一つに合わせると、「複合いきおい」はX=7.1となった。

回帰式にX7.1をあてはめ、Y（'96総選挙と'95年参院選の自民党当選者数増減定数比の予測値）を求めると、5.0になった。この値は、'96年と'93年総選挙の自民党当選者の差と、'95年と'92年の参院選の同じく差の差を、衆院と参院の定数と752で割って100倍した数値にあたる。したがって、この5.0の数値から'96年の当選者数を推計すると、驚くことには238.6で四捨五入すると239人となった。

複合いきおいの7.1が、自民復興率引力となったが、表5-2をよくみるとM「好きな政党なし層」のいきおいは-3.4と失速。S「自民支持層」のいきおいが+10.5で出力アップの片肺飛行であった。つまり、自民支持層組織の集結度は、'95参院選後も高まりを示しているが、無党派層の人気度は盛り上がり欠けていた。この無党派層で中核となる「好きな政党なし」の相対的ないきおい凋落が、最後に伸び悩んで過半数に達しなかった大きな原因の一つであったといえる。

次は社民党と共産党も直前の選挙中の世論調

表5-1 自民党のいきおいと当選者数

衆・参選挙	自民党支持率	無党派層支持率	(S) 同党候補者支持率 自民党支持層の	(M) 自民党候補者支持率 好きな政党なし層の	ウエート いきおいに1/2の 参院選挙だけ、Mの		自民党当選者数
参 '86年	37.1	39.6	32.2	55.1		参 '86年	72
'89年	25.6		20.8	20.5		'89年	36
'89年-'86年	-11.5		① -11.4	-34.9 ② M/2 =-17.5		'89年-'86年 定数 252	-36 -36/252 =-14.3
①+②			-28.9				
衆 '86年	37.1		32.2	55.4		衆 '86年	298
'90年	39.2	47.8	34.1	43.7		'90年	275
'90年+'86年	2.1		① 1.9	② -11.7		定数 512	-23 -23/512×100 =-4.5
①+②			-9.8				
参 '89年	25.6		20.8	20.5		参 '89年	36
'92年	34.9	40.2	31.9	40.3		'92年	68
'92年-'89年	9.3		① 11.1	② M/2 19.8 =9.9		定数 252	32 32/252×100 =12.7
①+②			21.0				
衆 '90年	39.2	47.8	34.1	43.7		衆 '90年	275
'93年	25.3	43.0	20.6	37.9		'93年	223
'93年-'90年	-13.9	-4.8	① -13.5	② -5.8		定数 511	-52 -52/511×100 =-10.2
①+②			-19.3				
参 '92年	34.9	40.2	31.9	40.3		参 '92年	68
'95年	20.2	56.7	18.6	29.1		'95年	46
'95年-'92年	-14.7	16.5	① -13.3	-11.2 ② M/2 =-5.6		定数 252	-22 -22/252×100 =-8.7
①+②			-18.9				

Sは「政党・集散型いきおい」で支持の集結度を示す（比率は全体比）

Mは「好きな政党なし層・伸縮型いきおい」で人気度をあらわす（比率は小計比）

表5-2 自民党のいきおいと当選者数

('93-'96年の「複合いきおい」と衆・参当選者数の増減定数比)

衆・参選挙	自民支持率	無党派層支持率	(S) 同党候補者支持層の自民党支持層の	(M) 自民候補者支持層の好きな政党なし層の			自民党当選者数
衆 '93年	25.3	43.0	20.6	37.9		参 '95年	46
参 '92年	34.9	40.2	31.9	40.3		参 '92年	68
① '93-'92	-9.6	-2.8	-11.3	-2.4		参 '95-'92年	-22
衆 '96年	21.8	56.7	19.2	30.6		衆 '96年	239
衆 '93年	25.3	43.0	20.6	37.9		衆 '93年	223
② '96-'93	-3.5	13.7	-1.4	-7.3		衆 '96-'93年	16
③ ②-①	6.1	16.5	9.9	-4.9			
'96	21.8	56.7	19.2	30.6		衆 ① '96-'93	16
'95	20.2	56.7	18.6	29.1		参 ② '95-'92	-22
④ '96-'95	1.6	0	0.6	1.5		①-②	38
⑤ ④+③	7.7	16.5	⑥ 10.5	⑦ -3.4		定数 500+252 =752	38/752×100 =5.1
④+⑦			7.1				

'96年総選挙「複合いきおい」

衆・参当選者数の増減定数比

査から、同じ要領の差の差で、複合いきおいを求めた。図7、8参照。社民党の方は参院選の'95年-'92年と、衆'96年-参'95年のいきおいの差を対比して差の差を出し、複合いきおい-13.1を算出。

これを社民党いきおいの回帰式

$$Y = 0.42199X - 1.0688$$

のXにあてはめると、Yは-6.6。この-6.6は社民党の'96年総選挙と'95年参院選の当選者数

増減定数比の予測値である。この数値から'96年の当選者数を推計すると14人となった。この低落を裏書きするように、S「社民支持層」もM「好きな政党なし層」、どちらのいきおいてもマイナスで、特に人気度の指標であるMは-12.3と「末期的症状」を示していた。

共産党の方は衆院選の'96年-'93年、参院選の'95-'92のいきおいの差を対比して差の差を出し、複合いきおい+4.9を算出、これを共産党いきおい回帰式

表 6-1 社民党（社会党）のいきおいと当選者数

衆・参選挙	社民党支持率	無党派層支持率	(S) 同党候補者支持率 社民党支持層の	(M) 社民党候補者支持率 好きな政党なし層の	参院選のみMの いきおいに 1/2のウェイト		参	社民党当選者数
参 '86年	10.3	39.6	6.6	15.9			参 '86年	20
'89年	22.1		20.4	56.5			'89年	47
'89年-'86年	11.8		① 13.8	40.6	② 20.3		定数 252	27
①+②			34.1					$27/252 \times 100 = 10.7$
衆 '86年	10.3		6.6	15.9			衆 '86年	85
'90年	18.9	47.8	13.2	25.6			'90年	136
'90-'86年	8.6		① 6.6	② 9.7			定数 512	51
①+②			16.3					$51/512 \times 100 = 9.96$
参 '89年	22.1		20.4	56.5			参 '89年	47
'92年	12.1	40.2	10.6	24.8			'92年	22
'92年-'89年	-10.0		① -9.8	-31.7	② -15.9		定数 252	-25
①+②			-25.7					$-25/252 \times 100 = -9.9$
衆 '90年	18.9	47.8	13.2	25.6				136
'93年	8.3	43.0	5.9	16.1				70
'93年-'90年	-10.6	-4.8	① -7.3	② -9.6			定数 511	-66
①+②			-16.8					$-66/511 \times 100 = -12.9$
参 '92年	12.1	40.2	10.6	24.8				22
'95年	7.4	56.7	6.7	20.8				16
'95年-'92年	-4.7	16.5	① -3.9	-4.0	② -2.0		定数 252	-6
①+②			-5.9					$-6/252 \times 100 = -2.4$

表6-2 社民党のいきおいと当選者数

('92-'96年の「複合いきおい」と衆・参当選者数の増減定数比)

衆・参選挙	社民支持率	無党派層支持率	S 同党候補者支持率 社民党支持層	(M) 社民党候補者支持率 好きな政党なし層	ウエート いきおい 1/2 の 参院選のみ(M)の			社民党当選者数
参 '95年	7.4	56.7	6.7	20.8			参 '95年	16
参 '92年	12.1	40.2	10.6	24.8			参 '92年	22
④ '95-'92	-4.7	16.5	-3.9	-4.0	-2.0		衆 '96年	15
衆 '96年	2.9	56.7	2.0	6.5			衆 '93年	70
参 '95年	7.4	56.7	6.7	20.8			衆'96-'93年 ①	-55
⑤ '96-'95	-4.5	0	-4.7	-14.3			参'95-'92年 ②	-6
⑤-④	0.2	-16.5	④ -0.8	-10.3	⑦ -12.3		①-②	-49
④+⑤			-13.1				定数 752	$-49/752 \times 100 = -6.5$

「複合いきおい」

衆・参当選者数の増減定数比

$$Y = 0.3258X - 0.5493$$

のXにあてはめると、Yは+1.0になった。この数値から'96年総選挙の共産党当選者数を推計すると25人。

(4) 新進、民主は「構造的いきおい」で予測

これまでの政党のいきおいは、前回選挙との差をとって、時系列的に変化をみてきた。しかし、新党の場合は前回選挙に出ていないので、この時系列的いきおいを使うことができない。そこで、1回だけの調査で「いきおい」が読めないかいろいろ新しい方法を研究した。このいきおいは、さきの「時系列的いきおい」に対して「構造的いきおい」と名をつけた。これはまだ、実験段階のものである。

表8「'96年総選挙『構造的いきおい』による各政党当選者数推計」は、朝日新聞社が'96年総選挙中に世論調査して一部報道したデータを基に、加工したものである。S「政党支持層が自分の政党の候補者を支持する割合」は、時系列的いきおいのものをそのまま使った。m「『好きな政党なし層』の各政党・候補者支持の割合」は、時系列的いきおいのものを全体比に直したものである。このSとmは有権者がどの政党・候補者に投票するかを明らかにした確かなもので、2つを合計し①「投票行動のいきおい」として取り上げた。

Sは選挙のときのいわゆる「政党支持率」で、政党支持質問の第1段階にあたる強い支持である。T「投票する政党」は、いろいろな政党の立場の人が政党・候補者への投票行動を表明した、政党別トータルである。新しい選挙制度の

表7 共産党のいきおいと当選者数

('92-'96年の「複合いきおい」と衆・参当選者数の増減定数比)

衆・参選挙	共産党支持率	無党派層支持率	(S) 同党候補者支持率 共産党支持層の	(M) 共産党候補者支持率 好きな政党なし層の	ウエート いきおい1/2の 参院選のみ(M)の			共産党当選者数
参 '86年	3.0	39.6	2.1	7.8			参 '86年	9
'89年	2.9		2.4	6.2			'89年	5
'89年-'86年	-0.1		① 0.3	② -1.6	③ -0.8		定数 252	-4 $-4/252 \times 100 = -1.6$
①+②			-0.5					
衆 '86年	3.0		2.1	7.8			衆 '86年	26
'90年	2.5	47.8	2.0	8.3			'90年	16
'90年-'86年	-0.5		① -0.1	② 0.5			定数 512	-10 $-10/512 \times 100 = -2.0$
①+②			0.4					
参 '89年	2.9		2.4	6.2			参 '89年	5
'92年	3.0	40.2	2.6	5.9			'92年	6
'92年-'89年	0.1		① 0.2	② -0.3	③ -0.15		定数 252	1 $1/252 \times 100 = 0.4$
①+②			0.05					
衆 '90年	2.5	47.8	2.1	8.3			衆 '90年	16
'93年	2.8	43.0	2.3	6.6			'93年	15
'93年-'90年	0.3	-4.8	① 0.2	② -1.7			定数 511	-1 $-1/511 \times 100 = -0.2$
①+②			-1.5					
参 '92年	3.0	40.2	2.6	5.9			参 '92年	6
② '95年	2.7	56.7	2.4	10.2			'95年	8
②'95年-'92年	-0.3	16.5	① -0.2	② 4.3	③ 2.2		定数 252	2 $2/252 \times 100 = 0.79$
①+②			2.0					
衆 '93年	2.8	43.0	2.3	6.6			衆 '93年	15
① '96年	3.5	56.7	2.9	12.9			'96年	26
'96年-'93年	0.7	13.7	① 0.6	② 6.3			定数 500	11 $11/500 \times 100 = 2.2$
①+②			6.9					
①衆 '96-'93	0.7	13.7	0.6	6.3			衆 '96年-'93年	11
②参 '95-'92	-0.3	16.5	-0.2	2.2			参 '95年-'92年	2
①-②	1.0	-2.8	① 0.8	② 4.1			定数 752	9 $9/752 \times 100 = 1.2$
①+②			4.9					

「複合いきおい」

衆・参当選者数の増減定数比

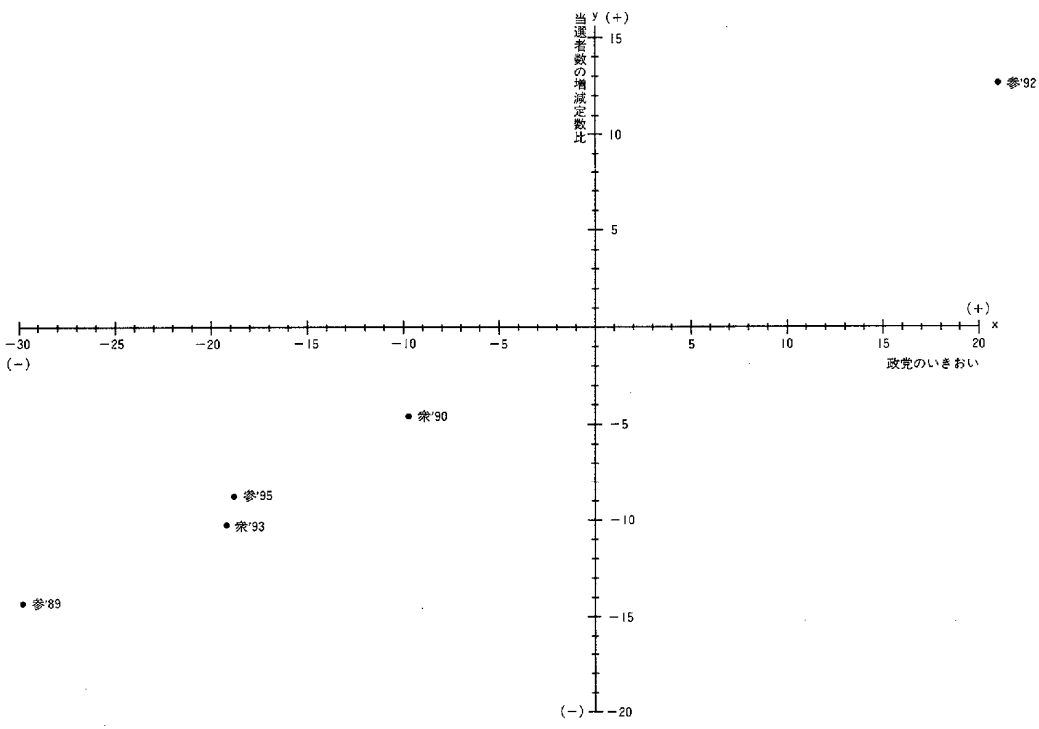


図5. 自民党のいきおいと「当選者数増減」の相関図

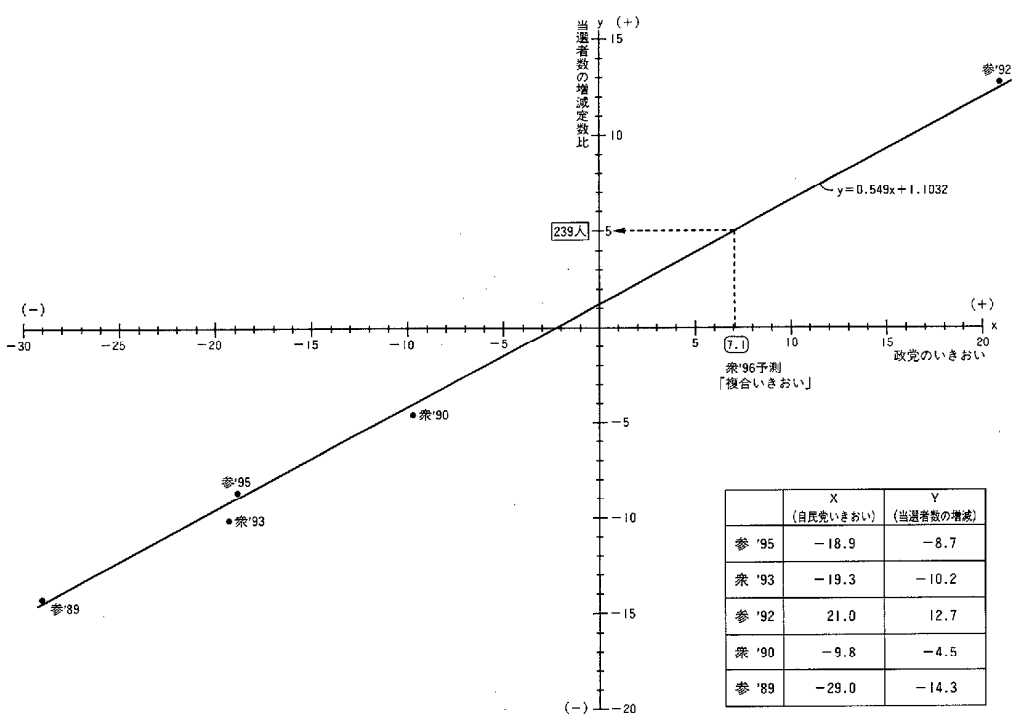


図6. 自民党いきおいの回帰直線で'96衆院選当選者数を予測

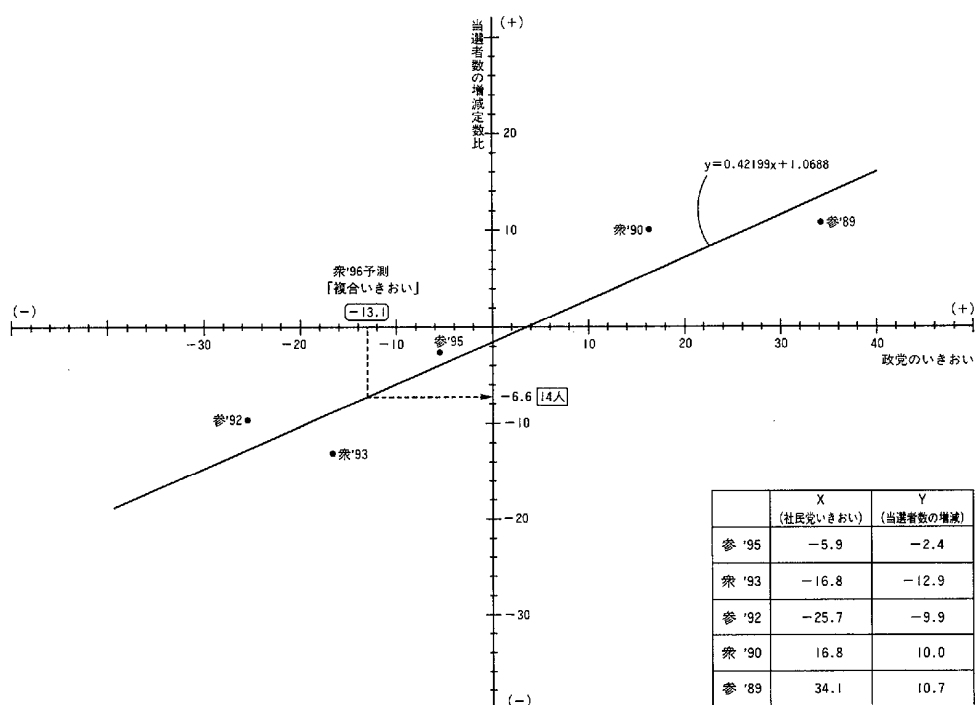


図7. 社民党いきおいの回帰直線で'96衆院選当選者数を予測

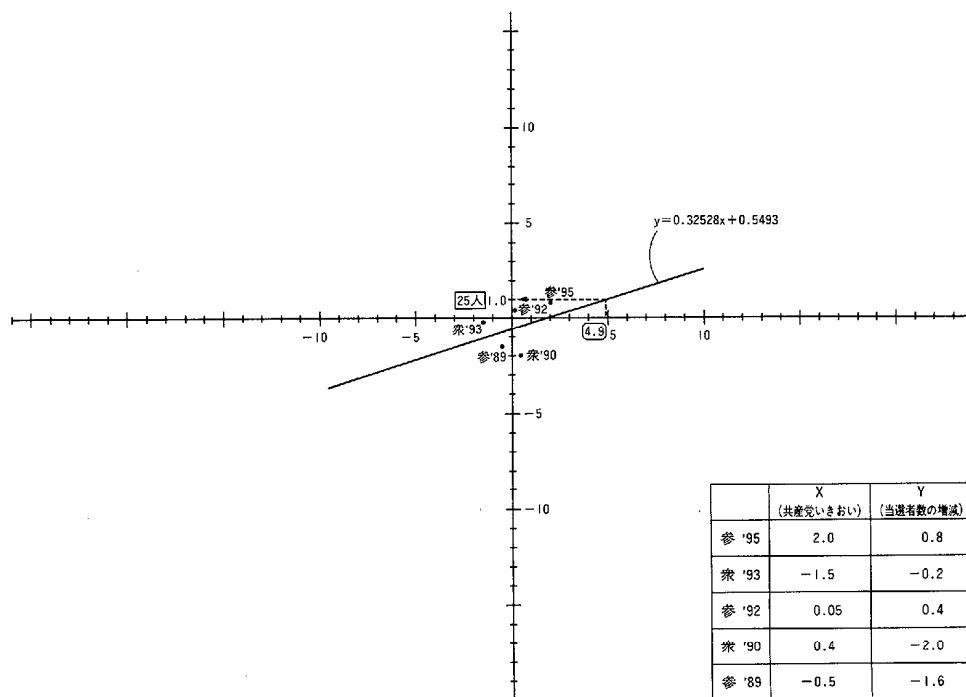


図8. 共産党いきおいの回帰直線で'96衆院選当選者数を予測

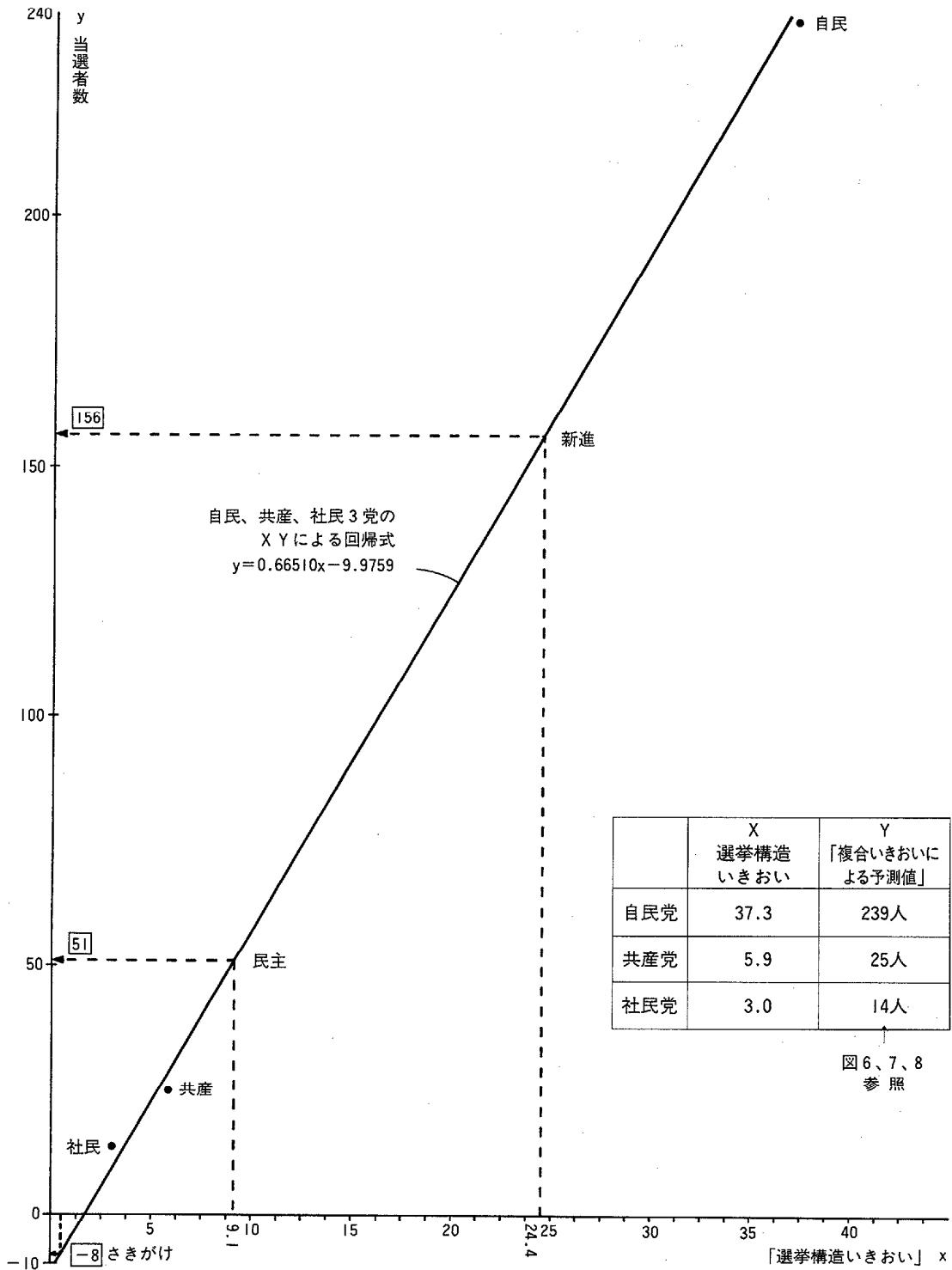


図9. '96総選挙「構造的いきおい」による各政党当選者数の推計

表8 '96年総選挙「構造的いきおい」による各政党当選者数推計

	(S) 各党・候補支持 政党支持層の	(m) の各政党・候補支持 「好きな政党なし層」 (全体比)	① $\left(\frac{s+m}{2}\right)$ のいきおい 投票行動	S 政党支持率	(T) 投票する政党 (トータル)	② $\left(\frac{S+T}{2}\right)$ 2大政党 支持層のいき	③ $\left(\frac{m-s}{2}\right)$ のいきおい 「好きな政党 なし層」の投票 おい(自民、新進)	①+②+③ 「構造的いきおい」	④ 推計による当選者数 「構造的いきおい」	⑤ 選挙結果の当選者数	⑤-④ 差
自 民	19.2	14.1	16.7	21.8	24.6	23.2	-2.6	37.3	239	239	+0
新 進	7.9	12.5	10.2	8.6	15.1	11.9	2.3	24.4	153	156	+3
民 主	3.8	9.3	6.6	5.1	8.9		2.5	9.1	51	52	+1
共 産	2.9	5.9	4.4	3.5	5.8		1.5	5.9	29	26	-3
社 民	2.0	3.0	2.5	2.9	3.4		0.5	3.0	10	15	+5
さきがけ	0.3	0.4	0.4	0.5	0.4		-0.05	0.35	(-8)	2	+10

図9の $y = 6.66510x - 9.9759$ 回帰式による当選者数推計自民 $y = 6.66510 \times 37.3 - 9.9759 = 239$ 新進 $y = 6.66510 \times 24.4 - 9.9759 = 153$ 民主 $y = 6.66510 \times 9.1 - 9.9759 = 51$ 共産 $y = 6.66510 \times 5.9 - 9.9759 = 29$ 社民 $y = 6.66510 \times 3.0 - 9.9759 = 10$ (さきがけ $y = 6.66510 \times 0.35 - 9.9759 = -8$)

小選挙区は2大政党の争いになるといわれているので、いきおいを自民党と新進党に絞り②「2大政党支持層のいきおい」として用いることにした。

その他、構造的いきおいとしていろいろな方法を試みたが、③として採用したのはm「好きな政党なし層」のいきおいと、S「政党支持層」のいきおいの差。mがSをどれくらい上回っているか、下回っているかで、投票直前の票の伸縮を予測する物差しとした。これをみると、自民党だけがマイナスになっており、投票直前になって伸び悩む自民党の姿を写し出しているといえる。これら①と②と③を合計して、「構造的いきおい」を算出した。

これと、さきの時系列的いきおいで推計した自民党239(図6)、社民党14(図7)、共産党

25(図8)をもとに、まず回帰直線を求めた。X軸に「構造的いきおい」の数値を、Y軸には「当選者数」の推計値を目盛り、自民、社民、共産の点を打ってみると、これもほぼ直線になった。図9を参照。

回帰式を求めると、 $Y = 6.66510X - 9.9759$ となり、Xに各政党の「構造的いきおい」の数値をあてはめ、当選者数を推計してみたのが票8である。さきがけの予測値は論外だが、新進、民主などは選挙結果に近い予測値で、自民はずばりの中した。しかし、共産はプラスのいきおいが、また社民は逆にマイナスのいきおいが出すぎた感じで、時系列的いきおいの方が結果に近かった。

むすび

政治現象が、世論動向の反映であるならば、その世論の動向を確認する最高の行事が総選挙、といえよう。だが、情報化社会が進展する中で総選挙の動向を、単純な世論調査・分析方法で予測することは難しくなってきた。

世論の流れは多様化し、それらが複雑にからみあって「勢力」を形作り、そのいきおいの赴くままに選挙の結果をも、変えていく。どんな新しいいきおいが、選挙の情勢をリードしているのか、調査データの中から読み取ることが大切である。

'96年総選挙を、できる範囲で「いきおい」分析により政党別当選者数の推計を試み、その検証をしてみた。まず「いきおい」を政党支持層の組織・集散型いきおいと、無党派層の中核、好きな政党なし層の浮動的・伸縮型いきおいに分けて分析した。この2つのいきおいを、時系列的にからませながら「複合いきおい」を算出した。時系列的に分析することができない新党については、「構造的いきおい」を試算した。

検証の結果は、できすぎた感じである。たしかに、選挙結果が出ているので、それに引っ張られる傾向がなかったとはいえない。しかし、この「いきおい」が、世論の動向の情報を十分に持ち、世の中の動きをより正確に解くカギを握っていることは確かである。

この「いきおい」分析は、選挙予測だけでなく、広く社会現象の予測にも応用できるはずである。いま、R&Dの生活価値観調査データをもとに、社会の動きを読む新しい「いきおい」分析にも取り組んでいる。機会をみて、また発表できれば幸いである。

最後となりましたが、このいきおい分析の研究を進める上で指導いただいた林知己夫先生（統計数理研究所名誉教授）と、またご支援、ご協力いただいた朝日新聞社世論調査の皆様には感謝を捧げます。

（注）1995年の東京都、大阪府知事選挙で無

党派層は一躍、檯舞台に踊り出て、脚光を浴びた。この無党派層が注目され始めたのは、1976年総選挙にさかのぼる。朝日新聞社の総選挙世論調査の政党支持率によって、無党派層の存在がはっきり印象づけられた。

政党支持率調査では、第1段階質問として「どの政党が一番好きか」と聞き、政党名を答えてもらう。この質問に「好きな政党なし」とか、答えなかった人たちを無党派層と呼ぶ。'76年総選挙の政党支持率調査で、自民が31.7%だったのに対し、「好きな政党なし層」は20.2%、「答えない層」18.0%で計38.1%になり、自民党を抜いて第一党に踊り出た。

'93年総選挙のときは、自民25.3%に大きく後退し、無党派層は43.0%に増大。'96年総選挙では、自民21.8%と伸び悩んでいたのに対し、無党派層は56.7%と有権者の半数以上を占める一大勢力になった。

参考文献

- 1) 林知己夫、岡本宏 (1983) “日本人の政治感覚”、井光書店 PP.58～80。
- 2) 白鳥令、岡本宏 (1984) “分割統治”、芦書房 PP.106～140。
- 3) 西平重喜、岡本宏 (1985) “ケースデータにみる社会・世論調査”、芦書房 PP.25～48。
- 3) 岡本宏 (1987) “「304議席」3次曲線がよんだ”「科学朝日」1、PP.36～41。
- 4) 岡本宏 (1993) “いきおい現象の一考察”日本世論調査協会報「よろん」72、PP.3～18。
- 5) ノエルーノイマン、池田謙一訳 (1988) “沈黙の螺旋理論”、ブレーン出版 PP.1～61。
- 6) 林知己夫 (1993) “行動計量学序説”、朝倉書店 PP.140～161
- 7) 読売新聞社編 (1996) “大変革への序章検証・新制度下の'96衆院選”読売新聞社、PP.15～195。